

政党政治家・江藤哲蔵と近代日本（一）

海野大地

はじめに

本稿では、明治・大正期の政党政治家江藤哲蔵に宛てられた書簡群を「江藤哲蔵関係資料」として翻刻紹介する。本資料は、江藤家に私蔵されており、このたび哲蔵の親族である江藤伸子氏のお取り計らいにより、閲覧および撮影を許され翻刻公刊することとなった。本資料は、哲蔵の義理の息子である江藤太郎氏が編纂し、哲蔵の孫にあたる江藤哲太郎氏によって近年自費出版された伝記『江藤哲蔵伝』（国立国会図書館などで閲覧可能、以下『哲蔵伝』^①）が編纂される過程で、整理保管のためにまとめられた史料群とみられる。哲蔵が一九一九年に早逝したあとに遺品等が整理されるなかで、後世に残すべきものとして選りすぐられたものと見受けられ、政党政治家を中心とする知名な人物からの書簡が数多くみられる。ただ『哲蔵伝』では、本史料の全容については言及されておらず、またかなり限定的な利用にとどまっております。未翻刻未使用の史料がそのほとんどを占めている。

本資料は主に書簡と葉書によって構成されており、差出者ごとにAからFまでの六冊のファイルに整理保管されている。そこで翻刻刊行にあたっては、このファイル名を整理番号として採用した（A〇〇＝Aファイルの〇〇番目に所収）。なお、江藤哲蔵宛の野田卯太郎書簡（ファイル欠損分であるB一〜九カ）など二〇数点が熊本県立図書館に寄

贈されており、同館において目録がつくられている^②。これらを除いた一七〇点あまりを、翻刻公刊することとしたい（今回はA Bをとりあげ、全三回を予定している）。

なお江藤哲蔵をとりあげた論稿として、前述の『哲蔵伝』のほかにも、伸子氏による論稿「江藤哲蔵…もう一人の『選挙の神様』」がある^③。同稿は『哲蔵伝』に加えて、関係者の伝記や新聞資料などを駆使して新たに考察を加えたものであり、江藤哲蔵の事績を知るうえで貴重な成果である。

以下、第一章では、右記の成果をふまえながら、哲蔵の事績をとくに政党政治家としての立身出世に着目してまとめる。そして、第二章以降では、『江藤哲蔵関係資料』を用いて、いくつかのテーマを設定して考察を加え、本資料を通して、江藤哲蔵が生きた近代日本をとらえる新たな視角を提示したい。

第一章 江藤哲蔵について

第一節 政党政治家としての立身出世…党人派の出世頭

江藤哲蔵は、一八七二年九月五日（旧暦八月三日）、江藤家に婿入りした父禎治と母すえのもとに生まれた。江藤家は、熊本県合志郡陣内村（現在、菊池郡大津町陣内）の旧家であり、県下有数の豪農として江

戸時代には「在御家人」を務めた⁽⁴⁾。維新を迎える時期にあたり、江藤家では七代武七郎の後継ぎが問題となり、武七郎は四〇代となってようやく生まれた後継ぎの茂（一八五生、八代、哲蔵の叔父）がいまだ幼く、家督を継ぐまで時日を要したことから、万が一のために矢野家より婿養子をお願い受けた。このようにして江藤家に入った哲蔵の父禎治は、茂の成長とともに家中での立場を難しくしていったようである。そのため哲蔵は、父より家の外での立身出世を望まれたといい、それが紆余曲折を経て政治家を志す一因となったといえる。もともと江藤家は当地方の名士であり、父禎治も熊本県会議員に選出されるなど多方面に活動していた。しかしながら一八八六年の暮れに、四二歳の若さで早逝してしまう。

このとき、まだ一四歳であった哲蔵は、一念発起して翌一八八七年春に上京し、帝国大学への登竜門のひとつであった共立学校に入る。その当時の地主・資産家の次男三男がそうしたように、都下での立身出世を目指したのである。しかし、東京帝国大学への入り口であった大学予備門に進むために、十分な成績を修めていたが、病によって進学することは叶わず、二年余りで郷里熊本へ戻ることになった。

熊本に帰った哲蔵は、佐々友房らを中心とした国権派に対抗した、民党派の実学派に与する若者のひとりとして、政治的な活動に従事した。この小青年期を、哲蔵は次のように回顧している⁽⁵⁾。

私の叔父〔茂〕などは〔県下を統一した政治結社紫雲会の〕謀反組中の横井小楠系を代表する一方の旗頭であった。さう云ふ関係から同志の遊説等に來る時は皆私の家に宿泊して行つたものである。従つて多くの先輩等とも交り無意識の中に是等の感化を受け遂には自ら進んで演説会の前座を勤めるやうになつた……斯くて

十八歳の時（一八九〇年ごろ）には既に政治家の玉子たりし

待ち望まれた帝国議会の設置を前にした、第一回衆議院選挙の際には、自由党系候補であった松山守善が江藤家を本陣としたことから、一八歳の哲蔵はこれに随伴し選挙運動に従事したという⁽⁶⁾。この経験が、哲蔵の政党政治家としての立身出世、とりわけ「選挙の神様」としての活躍に結実することとなる。

哲蔵の前半生については、次のような紹介記事がある⁽⁷⁾。

幼にして父母を喪ひ具さに辛酸を嘗む、夙に上京して共立学校に入り、一旦帰郷し政界に飛躍を試みんとし、自由党に属して大に自由民権説を唱道し、国民一般の政治思想を鼓吹す。後九州私学校を起して人材を養成せしが、自ら修養の足らざるを感じて同校を閉鎖し其子弟数人と共に東上し、東京専門学校に入りて行政学を修め、〔明治〕三十二年主席を以て卒業し、北海道及朝鮮に於て事業を計画し、傍ら郷党の爲めに尽瘁す。名望一時に揚り、三十七年衆議院議員に当選……

哲蔵は、国権派の濟々鬻とライバル関係にあった熊本英学校（のち九州私学校）を監督し、同校の存続が困難になると、哲蔵を中心として同窓生が一連上京して、一八九〇年代後半に東京に私塾東肥義塾をもうけて、熊本英学校・実学派の流れを引く熊本県人の寄宿舎とした。哲蔵は東京専門学校に学びながら東肥義塾の運営に尽力しており、詳細は不明であるが、そのさなか松田正久ら中央政治家との関係を深めたという⁽⁸⁾。このことは、哲蔵が政友会入りして若手のホープとして抜きんでていく契機となった。のちの回顧では、早稲田時代より

「既に院外者として政友会に出入」しており「政治家気取で居た」と語っており、党本部周辺で人脈形成を試みていたようである¹⁰⁾。

さらに重要な契機となったのは、江藤家の家督を継いだ茂が、熊本県会議員などを歴任し、第七回衆議院選挙で政友会候補となったことである。哲蔵は、この選挙を選挙長として切り盛りして勝利を掴み取り、政党政治家としての途を本格的に進みはじめていく。

第二節 早熟な政党政治家

とはいえ、哲蔵の中央政界入りは予定されたものではなく、偶然訪れた好機をつかんだ結果であった。第一九回帝国議会の解散による一九〇四年の第九回選挙で、政友会熊本支部は、議会解散にともなう臨時選挙であることから前代議士の再選を方針としたが、前代議士のひとりである小山雄太郎が、政友会の機関紙に私財をつぎ込んだことなどにより破産したため、急遽代替候補が必要となった。そこで白羽の矢が立ったのが、哲蔵であった。

叔父茂が一九〇二年の第七回選挙で当選した政友会代議士であり、その選挙戦を指揮したのが哲蔵であったこと、そして江藤家の十分な資力が哲蔵の出馬を後押ししたのである。父禎治のように熊本県会議員として地方議会に活動することなく、叔父の地盤を引き継いで全国議会に乗り出した哲蔵は、三二歳という若さで第九回総選挙に当選する。ここに、待ちわびた立身出世への道筋が、にわかには開けたのであった。

とはいえ、少壮の陣笠代議士に過ぎない哲蔵が、抜きんでた速さで政友会内に地位を確立していくためには、党有力者の後押しが必要である。そこで大きな意味を持ったのが、「松田の寵児」と言われるほどであった松田正久との関係であった¹¹⁾。同時代の評価をみると、大正

政変後の政友会において、哲蔵は松田系の「健全分子」、九州の「純良分子」と評されている¹²⁾。

こうした世評に加えて、政友会における他に類を見ない哲蔵の重用度合いを示すものとして、彼の党内ポストを一覧に示すと次のようになる¹³⁾。

一九一一年四月（三八歳）	幹事
一九一二年三月（三九歳）	幹事
一九一五年五月（四二歳）	幹事、党務員理事（新設）
一九一六年三月（四三歳）	幹事長
一九一八年三月（四五歳）	相談役（新設）
一九一九年三月（四六歳）	総務委員

政友会で毎年改選がセオリーであった党幹事を、一九一一年より二期連続、計三期務めたことが指摘できる。そのような例は、当時の政友会では哲蔵ただ一人であり、一期目は院外者として、二期目は途中代議士に当選して政党運営を支えた。

さらに一九一三年十月には、政友会を与党とする第一次山本権兵衛内閣のもとで、政党政治家としてはじめて勅任参事官に選ばれた。本資料のなかには、その当選を祝う書簡が複数あり、党人派代議士・黨員から若手のホープとして期待を寄せられていたことがうかがえる（B二二・B二七・B三四など）。

なお一九一四年三月、松田正久という強力な後ろ盾を失うも、政友会の絶対的な指導者となりつつあった原敬に重用されて、党内での存在感をさらに増していった。それは哲蔵が、選挙運動の指揮をはじめとした政党事務能力を有したためであろう。

その結果として、一九一六年三月、四〇代前半という若さで政友会幹事長に抜擢された。この予想されなかった抜擢人事について、『時事新報』は次のように評している。¹⁵⁾

氏の特徴はその愛党の熱誠にあり、選挙術の精通にあり。由来熊本の地たる、全国にをいて党争の最も激烈なるものたり。しかし氏は年少にして夙に党争に没頭し、多くの戦場を経来りぬ。その愛党心とその選挙術とは、この間に養はれ、この間に鍛練せられたるなり。

氏は愛党の為に原総裁の面を犯してはばからず、直言激語、時に総裁に迫る事あり、原総裁が氏を見こみたる実に斯の如き氏の態度を愛したるに因る。否これを以てその全部なりとは言ざるも、その多きに居れるや必せり。原総裁素直言硬骨の人、一度地位を代ふればこの種の人を喜び容れずんばあるべからず

「愛党」心と「選挙術の精通」こそが、哲蔵の武器であった。原は、日露戦争のさなかより、党内に信用のおける（他勢力に買収されない）「硬骨」を求めており、¹⁶⁾少壮の政友政治家が見出されていった。哲蔵はその一人にして、特に松田の死後は、原の寵児ともいべき存在となったのである。

哲蔵の政友政治家としてのハイライトは、やはり幹事長時代である。その前半は、第二次大隈内閣の野党として（一九一六年一〇月）、そして後半は、政友会に好意的態度をとる寺内内閣の準与党として党を支えた。野党となった政友会の党勢を挽回するために、与党時代に比して金回りが悪くなった党本部の切り盛り尽力したのである。若輩の幹事長は、党の先輩らに協力を求める裏方として動き、党務に奔

走した。その一端が、一九一六年八月初頭に、九州地方の政友会代議士の大先輩野田卯太郎に書き送った、次の書簡よりうかがえる。¹⁷⁾

今回ノ政局ハ実ニ言語問題ニテ遂ニ「第二次大隈内閣」居据ニ相成リ申候、政界益々紛糾を来スこと、存候、然ニ突然の儀に候得共小川君〔幹事長〕時代ニ本部経費へ御寄附の事御相談申上之有之候趣有之処、昨今本部財政甚だ窮乏ニ陥リ候に付此際御出金被下候はゞ大ニ助リ申候ニ付、御迷惑御察し申上候得共何分宜敷御願申上候

野党時代の政友会は、厳しい懐事情を有力幹部からの金銭的支援によつて乗り切ろうとし、多くの事業経営に関わり資力十分であった野田は、支援を請う有力候補の一人であった。原敬という強力なリーダーがいた政友会において、党幹事長に求められた役割は、指導力の強さよりも、党組織を維持し円滑に運営する点にこそあった。党人派代議士の出世頭として、「愛党」心のもとに党をまとめる。哲蔵は、そうした役割を十分に果たして、政権への返り咲きを準備した原の期待に応えたといえよう。

また「選挙術の精通」は、前述したように、哲蔵の立身出世の鍵を握るものであった。『江藤資料』にも選挙運動に関する書簡がいくつか残っている。そのひとつとして、一九〇七年九月の県会議員選挙において、哲蔵は熊本県選出代議士として同県下の運動をリードしており、幹事長の長谷場純孝より、党本部から支部への選挙助成費は二〇〇円で確定しそれ以上の支出は「絶対不可能」である旨を伝える書簡が届いている（A八）。

それが二期・八年を経た一九一五年九月の府県会議員選挙では、右

の立場が逆転する。この（統一）地方選挙で哲蔵は、党幹事兼党務員理事として党本部に詰めきり、各地方の応援要請に対応した。その一端として、広島県選出の党幹部望月圭介が運動費支出を求める書簡が残されている（A二五）。

第二次大隈内閣のもとで野党となった政友会は県議選でも劣勢となり、望月曰く、広島県では「同志会は黄白之卑策に依り」候補者買収がはかられ、これに対抗する運動費が不足したようである。このような書簡は、各地方より数多く党本部に出されたことであろう。とくに興味深いのは、望月が「若し一例にても支弁候様之事あらは、急御手配御被成下候様御願申上候」と、他地方との均衡を重視している点であり、党本部で選挙事務を裁いた経験を持つ党幹部としての配慮がうかがえる。あくまでも党中央の事情を組みながら、地方での党勢拡大をはかることが必要であり、望月の態度は党幹部が共有するものであったといえよう。望月はのちに党幹事長に抜擢され、哲蔵の急逝にともなう補欠選挙を取りしきった。

第三節 「選挙の神様」と熊本県

そして特筆すべきは、一九一七年四月、寺内内閣の準与党として迎えた第一三回衆議院選挙で、党幹事長として陣頭指揮をとり全国各地の選挙運動を差配したことである。その様子は、第一二回総選挙での立憲同志会の大勝に貢献した同郷の安達謙蔵に比されて「選挙の神様」と称されたという¹⁸。ここで注目したいのは、二大政党を指揮して競い合ったふたりの「選挙の神様」が、なぜいずれも熊本人であったのかという点である。

熊本県では、大選挙区制となった第七回選挙以降、郡部定数八議席を国権派（大成会・立憲同志会・憲政会）と政友派が争った。表1に示

表1 熊本県における衆議院総選挙

	政友	国権	ほか	最小得票当選候補		次点候補		次点 最小
第7回	3	5		高田露(政)	1,914	松山守善(政)	1,848	97%
第8回	3	4	1	小山雄太郎(政)	2,164	大淵龍太郎(帝)	2,079	96%
第9回	2	5	1	池松豊記(政)	1,623	高田露(政)	1,522	94%
第10回	3	5		原田十衛(政)	3,550	岡野次郎太郎	928	26%
第11回	3	5		江藤哲蔵(政)	3,509	その他	49	1%
第12回	3	5		平山岩彦(憲)	3,367	安達謙蔵(憲)	3,280	97%
第13回	3	5		平山岩彦(憲)	3,221	大谷高寛(憲)	1,406	44%

※『大日本政戦記録史』（1930年）を参照。国権派は、帝国党・大同倶楽部・立憲同志会・憲政会に属する。

したように、第七〜九回選挙では、厳しく議席が争われたのに対して、第一〇・一一・一三回と三度の選挙では、選挙前よりすでに政友派三議席／国権派五議席という勢力図が固まっており、選挙運動によってこれが揺らぐことは考えにくかった。このことは、哲蔵や安達がそれぞれ党本部に詰めて全国的な選挙運動をリードし、熊本県下のみならず、全国的な候補者調整、票読みやその差配、運動費の分配などに従事することを可能にしたといえよう。

例外となった第一二回選挙は、第二次大隈内閣のもと同志会優位で選挙戦が進み、党勢拡大・地盤浸食をはかって、あわよくば六つ目の議席を奪い取ろうとしたが、政友会は（相応の選挙干渉があったと予測されるが）三議席を守り切った¹⁹。このように、大選挙区制のもとで、熊本県における政友／国権派のパワーバランスはかなり固定化しつつあり、それが江藤哲蔵と安達謙蔵という、全国政党を背負って対峙した「選挙の神様」を輩出する背景となったといえよう。

第四節 惜しまれた夭折

このように哲蔵は、優れた事務能力により、野党から（実質的）与党に復帰する政友会を支える幹事長として、また「選挙の神様」として党をリードした。それゆえ哲蔵は、党内外を問わず、将来の大臣候補として見なされ、なかでも原敬は彼に大きな期待を寄せていた。

政友会は、一九一八年九月に成立した原敬内閣のもとで全盛を極めた。そこで哲蔵は新設された党相談役に抜擢され、党内のとりまとめを期待された。翌年三月には、第四一回帝国議会の閉会後に、老練な政党政治家とならんで、最高幹部である総務委員に選出される。熊本出身の古参党员であった井上敬次郎は、原首相（兼総裁）の悲願は同議会では満足に実現しなかったが、その意思は十分に国民へ伝えられたとして、翌年に控えた総選挙で第一党の地位を取り戻すべく、総務委員にまで昇った哲蔵に更なる奮起を促した（C一六）。

しかしながら、それからわずか三ヶ月後、六月二三日の夜半に、哲蔵はスペイン風邪とチフスの合併症によって急逝する。まだ四七歳の働き盛りであった。

この一報を受けた原は、哲蔵の早すぎる死に大きく落胆した。原の日記には「政友会総務江藤哲蔵死去せり、同人は長く本部に在りて党務に執掌せしが甚だ惜しむべき人物なりき、余親しく弔訪せり」と記されている。²⁰とくに葬儀での原の落胆ぶりは印象的であったようであり、それを間近にみた哲蔵の長女淑子氏は、この時の様子を「父の死」と題して書き残している。²¹そこには、哲蔵を重用しその将来に大きな期待を寄せていた、原の姿が克明に綴られている。

もう夜が明けはじめていた。大正八年六月の二十四日である。朝八時ごろ、当時の首相・原敬氏が来られるという知らせに、母と

私は着物を着替え玄関に出迎えた。父の容体が悪くなってから殆ど三日にあげず見舞の電話をかけて来られた首相である。既にもの言わぬ父との対面に首相の目には涙があふれていた。首相は静かに私の方を向かれ「お父さんが亡くなられて寂しいね」と言われた。私はその時の涙にうるんだ首相の目を生涯忘れることができない。

二十七日午後二時から青山斎場で本葬が行われた。首相を始め各大臣列席のもとに二千人を越す会葬者であったという。麻布の歩兵三連隊から一小隊の儀使兵が式場の前に整列する物々しさであった。派手なことの嫌いな父があこの世でさぞ困った顔をしていることであろうと私は思った。各方面からの弔辞は皆父の徳を称え、その早世を惜しむものばかりであった。父は四十七歳の若さでこの世を去ったのであった。式も終わり大方の人たちが殆ど引き上げた後、原首相が祭壇の前に首をうなだれ身動きもせず立ちつくしておられた後ろ姿が私のまなこの奥に焼き付けられて、八十年後の今日もなお坊佛と思ひ浮かぶのである。

第二章 第二次大隈内閣後継問題と

衆議院補欠選挙

政党政治家として立身出世した江藤哲蔵の生涯は、以上のようにまとめられよう。第二章以降は、『江藤資料』について注目される書簡をとりあげ、いくつかのテーマを設定し検討したい。

第二章では、政友会の一党優位が崩れ、立憲同志会が与党となった第二次大隈内閣期において、同内閣が後継内閣問題により世論の支持

を失うなかで、党勢挽回を狙った政友会が衆議院補欠選挙に意義を見出していく様を検討する。哲蔵は、このとき幹事長の重職にあったが、選挙運動の指揮や急病により党本部をしばしば空けており、政情が書状をもって伝えられ、その一部が本資料に所収される。

第一節 第二次大隈重信内閣の成立と後継問題

一九一四年四月二三日、第二次大隈内閣が成立するにあたって、熊本の先輩政治家であった原田十衛は、政友会がとるべき態度について次のように哲蔵に書き送っている（C二二）。

大隈内閣の成立に対しては同志の諸君中多少狼狽の状を呈する向も有之やニ察せられ苦々數存居候、同志、中正二派の獵官運動も最早一段落となり稍や鎮靜の模様、隈伯は大ニやる積りらしく察せられし候、之に対する我党の態度ハ慎重の上ニも慎重を要すべく、而して暫く彼等の為さんと欲する所を為さしめ、然る後徐ろに攻勢の態度ニ移り度窃ニ希望罷在候、御高見果して如何

大隈内閣が綻びをみせるときが、政友会が再起を図る好機であるというのである。

翌一九一五年三月の第一回選挙は、いわゆる「大隈ブーム」のもとで、世論を掴む選挙キャンペーンが展開され、さらに大浦内相による選挙干渉が政友会の議席を削り取った²²。同志会・中正会・公友倶楽部（大隈後援会）の与党三派が全議席のうち六割以上を獲得し、政友会は全体の三分の一にも満たない議席にとどまる大敗を喫した。

しかしながら、同志会の時代は長く続かなかつた。政友会が再起をはかる好機は、早くも選挙の一年後、一九一六年夏より浮上した第二

次大隈内閣後任問題としてあらわれたのである。老年であり長期政権を希望しない大隈は、同志会を率いる加藤高明に政権を譲ろうとしたが、キャビネットメーカーである山県有朋は同志会の単独政権を許さず、少なくとも寺内正毅との連立でなければならぬとした。これに対して寺内は、同志会のみならず政友会の支持を受けた挙国一致内閣を主張し、大隈が主張した連立内閣案を一蹴した。大隈は、加藤一同志会が主導権を失うことを懸念して、寺内のみに大命が下ることを避けようと動き、山県・寺内との折り合いを欠いた²³。また大隈は、加藤らに秘匿して右の政治工作を行ったこともあり、政友会を入れた挙国一致内閣を呑むことは難しかった²⁴。

大隈内閣後任問題は、幹事長となつた哲蔵が直面した最大の政治課題であつた。ただ同問題が佳境に入つた七月下旬に、哲蔵は幹事長として北海道入りして道議会選挙を指揮しており、また八月初頭から中旬にかけて本格化した大隈―山県寺内会談のさなかには、急性腸カタルにより病床に伏していた²⁵。その結果として、中央の政治動静とそれに対する党の動きが書簡によつて伝えられ、そのいくつかが『江藤資料』に残された。

まず、党幹事の**小坂順造**による七月十二日付書簡である（B二四）。**小坂幹事**は、「大隈伯辞職風説」について、大隈内閣は居座りの噂もあるが、天皇に奏上して元老への御下問が済まされたという情報が複数の筋から伝わっており、また「役所ノ方」では「内閣投出シ」を見越した「未決済事」が多いことから内閣交代は近いとみた。したがつて政友会内は総裁以下「傍観ノ態度ニテ静ニ時ヲ移ルヲ俟ツ方針」のもと臨戦態勢にあり、自分もこれを最善策と考えていると続けた。そして後継指名が噂された寺内の真意はいまだ判然としないが、哲蔵が帰京（回復）する頃には動きがあるであろうと伝えている。

大隈が辞職を奏上しながら後継候補未決で居座りをはかると、天皇を政治利用した内閣持続策であると批判され、八月初頭に山県・寺内との会談内容が漏れ出たことで、世論の批判が高揚した。²⁶⁾ 政友会はこれを好機として、最強硬派の関東会は倒閣運動に乗り出そうと息巻いた。²⁷⁾ 結果として、八月一日の大隈―山県会談で最終決定がなされ、寺内加藤連立内閣構想は破談となった。その顛末は、寺内側より『時事新報』に漏らされた。²⁸⁾ 原が山本達雄より聞いたところによれば、当初寺内は他の新聞メディアにも流用して追撃を加える手筈であったが、一六日に参内したのち追撃計画を取りやめたという。²⁹⁾ 『山県有朋談話筆記』によれば、このとき寺内は大正天皇に意見を求められて態度保留を願ひ出ている。³⁰⁾ それゆえ倒閣運動に転じることを避けたのであろう。

『江藤資料』には、以上の経緯を探知した岡崎が、病床の哲蔵に送った政情報告が収められている（B三六）。

寺内伯転末を時事紙ニ発表、しかし其方法不良之為め広く新聞ニ転載せられず遺憾之事ニ候、夫故此件に就ては最早火の消たるか如し、只山県対大隈之間ニ於て未鎮火之模様ニハ候得とも、思ふニ例之老人官僚一般之慣手段テキパキ致候事ハある間布、結局水中放屁之類に終らされは幸ならん、鄙考ニハ、官僚等ジタバタ致し乍ら目的を達せざる中ニ彼是議會之近き候は、当年之議會ハ面白き波瀾を見るを得かと窃ニ樂居候、何分世見今回之大隈之処為ニ就て憤激するもの多きは誠に痛嘆すへき次第ニ候、小生近日山県公を訪問し其実況を承りて申と存居候

一九一三年の憲政擁護運動のような、新聞メディアを利用した輿論喚

起に至らなかったことを残念がる一方で、山県と大隈のあいだに入った亀裂は修復不可能であるとし、「例之老人官僚」（山県系官僚カ）は「テキパキ」倒閣運動を進めることはできないであろうが、この問題が「水中放屁」に終らず、将来的な政権交代に繋がれば幸いとした。

ただその一方で、事情通の岡崎は、政友会とりわけ党人派代議士・党員の多くが期待したように、大隈内閣が近く倒閣するとは見ていなかった。この点は、元老方面に明るい原ら政友会指導者と、強硬論を説く党内多数派とのズレが見られるところであろう。幹事長として後者をまとめる立場にあった哲蔵は、前者より確からしい情報を得る必要があった。

かくして岡崎は、年末の議会での「波瀾」を期待しつつ、大隈に対する世論の目が厳しくなることをして「誠に痛嘆」と綴った。そして、この停戦状態に終わった大隈内閣後継問題に並行して、二大政党が全面対決する季節はずれの選挙が準備されようとしていた。

第二節 補欠選挙と政党政治

大隈後継内閣問題で政界が揺れるなか、遠く海を隔てた北海道の地で、七月から八月にかけて政友会と同志会による激戦が繰り広げられた。両陣営の「選挙の神様」江藤哲蔵と安達謙蔵は、ともに現地入りして陣頭指揮をとり、選挙戦はかなりの接戦となった。その選挙結果をめぐっては両陣営がともに勝利宣言をするという異様な光景がみられ、政府集計では一名差で政友会の勝利となった。³¹⁾

そこで江藤は『東京朝日』紙上で、次のように勝利宣言を行った。³²⁾

政府等にては昨年総選挙の大勝に気驕りて今度も一挙に勝利を博せんと意気込み逸早く多数の応援隊を出して大活動を為したり、

我党は昨年敗残の余を受け居るのみならず、敵の有する官憲金力
 其他多数の応援は北海道にては特に政府党に有利なるを以て其結
 果に就ては多少危む処なきにあらざりしに、開票の結果は叙上の
 勝利を占むるに至りたるは昨年の選挙が如何に不自然なりしかを
 証明すると共に他面には現内閣の信望失墜せるの一証と見るを得
 べし云々

与党の選挙干渉・金権選挙のもとにありながら今回の選挙で勝利でき
 たように、昨年の総選挙の大敗は過剰な選挙干渉によることは明らか
 であるとし、また大隈内閣の信望が失墜したことを強調して、政友会
 の巻き返しをアピールしたのである。

このように当該期の選挙戦は、中央での党派争いの代理戦争として
 位置づけられており、それが補欠選挙に新たな意義づけをもたらすこ
 とになった。この点について、先行研究では十分な検討が加えられて
 こなかった。⁽³⁴⁾

そこで注目したいのが、イギリス(政治史)における補欠選挙(By-
 election)についての研究である。⁽³⁵⁾なかでもマシュー・ロバーツは、
 一九世紀末の英国自由党の指導者グラッドストーンが、補欠選挙を将来
 的な総選挙を占うものとして重要視して、これを「政治気象学
 (Political Meteorology)」⁽³⁶⁾と言いつづけたことに着目する。

近代日本において、第二次大隈内閣の成立は、政友会の一党優位を
 崩して二大政党政治へのシフトを促す重要な画期となった。第一二回
 総選挙で大敗を喫した政友会は、総選挙直後の一九一五年四月下旬
 に、政友会代議士(翠川鉄三)の急逝により行われた長野県の補欠選
 挙で与党三派と厳しく衝突し、中正会候補(風間礼助)に数少ない議
 席を奪われていた。

ただ、政友会の低迷はそう長く続かなかつた。原田十衛が江藤に論
 した、挽回の好機がすぐにやって来たのである。一九一五年五月に、
 政友会幹部の村野常右衛門が、先の総選挙をめぐる当時の内相大浦兼
 武が買収工作を行ったことを糾弾した、いわゆる大浦事件⁽³⁷⁾の責任を問
 われた大隈内閣は、世論の支持を減退させた。さらに前述した大隈内
 閣後継問題により、大隈首相の辞意内奏の取り下げが露見し天皇の政
 治利用として批判を集めた。

一九一六年の補欠選挙は、大隈内閣批判の高まりを追い風とした政
 友会にとつて、政界の天気模様が変転したことを示す絶対好機となつた
 のである。かくして政友会は、本来は到底勝ち目のない選挙に乗り出
 していった。それが一九一六年九月初頭を期日とする島根県補欠選挙
 であつた。

第三節 一九一六年島根県補欠選挙

島根県選出の憲政会代議士三浦倫吉の急逝にともない、衆議院補欠
 選挙が急遽開催されることになった。このとき原総裁は盛岡にあり、
 哲蔵は北海道での激戦疲れからか「急性腸カタル」を患い大阪で療養
 していた。⁽³⁸⁾ここで、指揮者のいない補欠選挙を主導したのが、総務委
 員の岡崎邦輔であつた。⁽³⁹⁾

島根県は、若槻礼次郎や江木翼など同志会系有力者の郷里であり、
 同志会は県下有権者の多くを占めた雲州地方に強固な地盤があつた
 が、いわゆる「スイングステート」としての側面もあつたようであ
 る。『時事新報』は、「時代主義の烈しき土地の事として時の政府に迎合
 するもの多数なるに加へて同地政友会の頭株に暗闘あり、策戦を誤り
 たる為め斯くも見苦しき敗戦を招きたるが兎に角地盤関係より打算す
 れば今日と雖も政友会の立候補必ずしも望みなきにあらず」と評した。⁽⁴⁰⁾

さらに同紙は、とある政友会幹部（岡崎カ）の言として、次のように報じている。⁽⁴⁾

同県は、昨年の総選挙に於て政友会全滅せるも其以前に於ては郡部定員七名中を選出し、昨年総選挙に於ける全滅は当局の干涉其他に原因し、実際に於て我党の勢力衰へたるは事実なるも総選挙に於て尚二名を選出するの力は充分に有し居り、補欠選挙に於て必勝を期する事は甚だ困難なるべきも地盤維持の爲め今回候補者を立つる必要あり

一九一六年八月二〇日、政友会島根支部長の園山勇（自由民権運動以来の県下有力者、元代議士）は、党本部の応援を得て恒松擁立を確定させ、運動方針を定めるため上京した（A二八）。政友支部は、有権者の多い雲州が相手党派の地盤であるため常に劣勢であり、同志会が与党となった先の総選挙では一議席も獲れなかった。同支部としては、中央の政情の変化を受けて大きな注目を集める今回の補欠選挙は、党本部からの全面的な支援が得やすい地盤浸食の好機であった。しかしながら、いくら政友会に追い風が吹いていたとはいえ、全部から一名の選出者を出す補欠選挙が、極めて厳しい選挙戦となることには変わりなかった。犠牲候補となる可能性が高いなか、通常以上に費用の掛かる補欠選挙に、候補を擁立することは困難ともなった。その候補となったのは、先の選挙で次点落選した恒松隆慶である。支部の打診を受けた恒松は、補選に打って出るか否か逡巡していた。犠牲候補となりかねない恒松を發奮させるためには、支部の支援だけでは不足であり、党本部の後援と軍資金支給が不可欠であった。そこで恒松もあわせて上京して、総務委員を中心に党幹部と意思疎通がはか

られた。

それは党本部が支部への支援を弱めれば、候補者擁立にさえ失敗する可能性を含んでいたことを意味した。岡崎は、こうした恒松擁立の過程と党本部による支援の詳細を、病氣不在の哲蔵に伝えている。二一日における支部代表や候補者の上京は党本部の態度を伺うものであり、運動費をめぐる支部の希望が、候補者本人が五千円を用意し超過分を党本部が負担するという点にあったことを伝え、まずは何より恒松本人の覚悟を見定める必要があるとした（B三六）。

同日の夜、岡崎は園山や恒松との協議内容を哲蔵や原に書き送った（B三七）。問題となったのは、同志会候補が遠藤嘉右衛門に決まったことであつた。必勝を期した同志会は、安達謙蔵を島根に送りこんで候補者選定を行い、多額納税者で早稲田大学出身の遠藤を擁立した。遠藤の強さは、まずはその資力にあり、さらに早稲田ラベルを背景に与党三派の後援を得られる強敵であつた。遠藤擁立の一報を受けた恒松はさらに逡巡した。親族が立候補見送りを求めたためである。これに対して園山支部長は、必勝は期し難いが全く太刀打ちできないわけでもないと継戦を求め、⁽⁴⁾また原宛書簡によれば、恒松以上の候補者はおらず擁立できなければ「遂ニ反対〔派〕之なすか儘ニ打任す之外なし」と恒松を説得したという。

この二一日の協議における争点は運動費支出にあつた。恒松は立候補を受諾した場合も五千円以上支出することは難しく、これを強要すれば立候補を辞退するおそれがあつた。それゆえ園山支部長は、超過分の運動費支出を党本部に求め、少なくとも七千円ほど用意するよう掛け合つた。これに対して岡崎らは、原総裁に相談する余裕がないとして総務委員の責任で三千円を支出し激励した。かくして恒松は立候補の意思を固め士気を高めたという。

また岡崎は、政友会の地盤である石見地方有志から床次の派遣を依頼され、派出を決めたことを知らせている。ただ留意すべきこととして、先の北海道会議員選挙とは違い、本部派出者を選挙戦の「頭領」「権力あるもの」とするまでには至らず、運動の主導権があくまで支部にあることを示唆した。それは同じタイミングで出された原宛書簡に「支部は党本部の遊説派遣を重視していい様子」と書かれていることからもうかがえる。支部は黄白を飛び交わせる終盤の白兵戦を重視したのであろう。

ここで注目したいのが、岡崎が二日夜に哲蔵と原に認めた書簡のなかで、総務委員の専断により運動費を支出したことを慎重に弁明して、「老兄ノ御不在返す、も遺憾」(哲蔵宛書簡、B三七)「江藤之病氣甚た不自由」(原宛書簡)と綴っていることである。原は総務委員の専断をどこからか聞き知って岡崎を問いただしたようであり、行き違いとなった岡崎は、翌二二日にあらためて次のように弁明した。⁴⁵⁾

無余儀景勢として補助額をも相定め、夫々即決専断仕候儀に而、補助の金額思召に大概過候段恐縮に不堪候(…中略…)殊に江藤不在、其辺之事情心得居候幹事一人も無之、補助之上に就而も過大に失候歟、今更甚た不相済候

右の記述より、幹事長となった哲蔵が政党資金の運営をほぼ一任されていたこと、それゆえ哲蔵不在の選挙戦は混乱を来したことがうかがえよう。このような背景のもと、政友会が待望した大隈内閣の自壊という好機を何とでも利用したい党人派幹部と、これに乗じて党勢挽回をはかろうとする島根支部の思惑が重なりあった。一九一六年島根県補欠選挙は、政界の「天気模様」をうらなう重要な一戦として位

置づけられたのである。

岡崎の狙いは、大隈内閣後継問題による党勢挽回の気運を、補欠選挙を通じて維持することにあつたように思われる。もし、右の協議に哲蔵が参加していたならば、厳しい政党運営のもと支出制限を迫られる幹事長としての立場と、党勢挽回を希求する党人派幹部としての立場がせめぎあう、難しい選択を迫られたことであらう。

党本部からは床次竹次郎を頭領とし、演説に通じた小久保喜七らを派遣して、島根を地盤とする若槻礼次郎が自ら応援演説に出向いた同志会や、これに応援弁士を派遣した公友会、早稲田系の大隈後援会からなる遠藤陣営と遊説合戦を演じた。⁴⁶⁾選挙戦は終盤まで五〇〇票内外を争う接戦となった。⁴⁷⁾岡崎は運動の最終盤で島根入りして、安達ら同志会陣営を驚かせた。開票日の九月三日、岡崎は党務に復帰していた江藤に情勢報告を行い、「支部之直轄する能義八束簸川等之各郡之景勢先以予定之如く相運候もの、如し、特ニ反対候補之立御地ニ向ひたる秦軍之勇猛なる突撃ハ遠藤をして一驚を喫せしめ候もの、如く」と反対候補の地盤侵食に自信をみせた(B三八)。

政友会は、同志会の根拠地であり最大の有権者数を誇った簸川郡を「関ヶ原」として、同郡の三分の一を獲得することに勝機を求めている。結果として、岡崎の観測とは異なり、そのほとんどは遠藤の票となり、それが「優に全体の運命を決」することになった。⁴⁸⁾

かくして敗戦に終わった政友会であったが、岡崎は先の総選挙に比べればかなりの好成绩であり、敗因は遠藤派の金権と政権の不法行使(買収工作と選挙干渉)であるとした。⁴⁹⁾実際に、第一二回総選挙と比べれば、政友会は相当善戦しており、あと八五〇票余りを奪いとれば逆転できるまでに、与党同志会に迫ってみせた(表2)。

なお、野党ながらも接戦に持ち込めた政友会は、与党として迎えた

表2 1916年島根県衆議院議員補欠選挙における郡別得票数／割合

	票数			百分比	
	政友	同志会	合計	政友	同志会
出雲地方	3,604	7,508	11,112	32	68
八束郡	1,305	1,613	2,918	45	55
能義郡	705	819	1,524	46	54
仁多郡	287	483	770	37	63
大原郡	145	849	994	15	85
飯石郡	649	379	1,028	63	37
簸川郡	513	3,365	3,878	13	87
石見地方	4,275	2,095	6,370	67	33
安濃郡	518	1	519	100	0
邇摩郡	325	322	647	50	50
邑智郡	1,030	256	1,286	80	20
那賀郡	1,143	690	1,833	62	38
美濃郡	812	648	1,460	56	44
鹿足郡	447	178	625	72	28
合計	7,879	9,603	17,482	45	55
第12回 島根郡部	3,811	16,385	20,196	19	81

参考：『大日本政戦記録史』（1930年）。『東京朝日』1916年9月6日2面。恒松の得票数は、7881票と記載されているが郡別獲得票数の合計をとった。

次の第一三回総選挙で、票数・当選者数ともに憲政会（同志会の後継政党）を上回り、恒松は二位以下に千票の差をつけて、トップ当選した（表3）。先の補選が島根県の党勢を塗り替える一つの画期となったのである。

以上にみた、補欠選挙をめぐる与野党の衝突激化について、『東京朝日』は社説で次のように説いた。⁵⁰

長野県と云ひ島根県と云ひ、最近の補欠選挙に対して、朝野両党は其全力を挙げて戦ひ、補欠選挙の進行中は殆ど何事をも放擲の有様なるは、従来殆ど見ざりし例なり。是れ今春來の補欠選挙は昨年の総選挙が、一時の変態たるを反証するに足るべき意義ある選挙として、天下に期待せられ、又せらるるが為に両党共に或は心ならずも無理に力瘤を入れつ、ある事情もあらんが亦一は我

表3 第13回衆議院総選挙での島根県郡部における票数・当選者数

	政友会	憲政会	ほか	
票数	8,707	7,364	1,884	17,955
百分比	48	41	10	100
当選者数	3	2	0	5
内訳	候補者	得票	党派、当選	
	恒松隆慶	3,778	政友○	
	高橋久次郎	2,695	憲政○	
	小川蔵次郎	2,501	政友○	
	島田俊雄	2,428	政友○	
	石田孝吉	2,348	憲政○	
	藤井朝一郎	2,321	憲政×	
原夫次郎	1,884	無×		

参考：『大日本政戦記録史』（1930年）。

国の政争が近時益々深刻に趨りつつある実例として見るべし。僅か一議員の得喪は今の朝野両党の対峙の実勢には何等の影響をも及ぼさず。然るに尚且近日の如く猛戦激争するは、愈々党争の常径を逸して感情的に陥れるを知るべきなり

政友会と同志会の二大政党が、たったひとつの議席をめぐる総力戦を繰り広げるといふ異状を、政党政治の弊害（党弊）として批判した一方で、野党の補欠選挙での巻き返しが先の総選挙の異様さ、与党による選挙干渉を示す証左となり得ることを示唆した。この点は、八月の北海道議会選挙における哲蔵の勝利宣言を援用したものといえよう。

とはいえ政党間競争の激化が補欠選挙運動費の異常な増大を促すことは、政党政治の（健全な）発展を妨げかねない問題であり、この点は政党側も留意していたようである。同社説は続けて、次点者繰り上げ期間を現状の一年から延長すること、選挙区を狭めることが議論されていることを紹介した。そして、小選挙区制への移行はあまりに重要な問題であり補欠選挙はその理由とはなりえないとし、衆議院議員選挙においても議席の穴埋め要員として「代位者」を選挙することを

一方法として主張した。⁵¹⁾

以上をふまえれば、前述した岡崎の敗北宣言は、単なる負け惜しみではないであろう。今回の補欠選挙が、議席獲得の是非という一か〇かではない、劣勢地での善戦が次なる総選挙に好影響をもたらすという、全郡選挙ゆえの独自の意義をもったことが指摘できよう。このように近代日本においても、政党政治が軌道に乗りつつあった一九一〇年代後半になると、補欠選挙をめぐって、二大政党が政界の天気模様をうかがいはじめ、また与党有利の総選挙の結果を糺そうとする野党の試みが見られた。大敗を喫した一九一五年の第一二回総選挙から、党勢の変化に政友会の挽回をアピールすると共に、先の選挙が選挙干渉によって票を奪われた結果であることを示そうとしたのである。それが、野党に甘んじた政友会とりわけ党人派幹部が、補欠選挙に見出した意義であった。

ここで興味深いことは、政友会本部が注力した島根県補欠選挙について『原敬日記』には一切の記述がないことである。それは、政友会の敗北に終わったことに加えて、岡崎らの「暴断」(八月三日付原宛書簡での岡崎自身の表現)により本意でない多額の支出が生じたことが、政党指導者としての原敬像にそぐわないためであろう。このことは、野党の巻き返しがいまだ世論誘導によって完遂されるものではなかったこと、すなわち元老というキャビネットメーカーが控える近代日本では、元老との寡頭交渉のもとでいかに有利な立場を得るかという点に政権争奪の鍵があり、それが二大政党政治の行方を規定したことを示す。

ただ、そうであっても、補欠選挙に新たな意義が見出されたことに注目し、それが野党時代を避け得ない二大政党に与えた影響を問うことは重要である。原内閣による小選挙区制の導入は、補欠選挙から全

郡選挙というスケールを失わせたが、まもなくして中選挙区制へ再拡大されたことで、政界の天気模様を占う補欠選挙の意義が、再び高まるためである。

(次号に続く)

注

- (1) 江藤太郎『江藤哲蔵伝』(江藤哲太郎、二〇一九年)。同書によれば、その刊行経緯は次の通りである。哲蔵の一人娘である淑子氏は、哲蔵の没後に、東京帝大で哲学を研究していた太郎氏と結婚した。江藤家に婿入りした太郎氏は大学教員を退官後、義父である哲蔵の事績をまとめることに奔走し、国会図書館に通い関係者を訪ね歩いて伝記執筆に注力した。刊行にはいたらなかったものの、亡くなる直前まで原稿に向き合っていたという。この太郎氏の原稿が、その息子(哲蔵の孫)である哲太郎氏の尽力によって見出され、二〇〇〇年ごろに一旦まとめられるも諸事情で刊行されず、二〇一九年に自費出版されるにいたった。
- (2) 熊本県立図書館編『江藤哲蔵関係資料目録』モエアー―二。
- (3) 江藤伸子「江藤哲蔵…もう一人の『選挙の神様』」(『近代における熊本の人物群像』熊本近代史研究会、二〇二一年)
- (4) 近世期の江藤家については、三澤純「熊本藩の在中瓦葺禁止令と江藤家住宅」(『人文科学論叢』五、二〇二四年)に詳しい。在御家人とは、藩への献金や社会的貢献に対する褒章として「庶民に名字帯刀などの身分的特権・格式を与える」という熊本藩の金納郷士制度であり、今村直樹・竹山瞬太「近世後期の在御家人制度と熊本藩政」(『永青文庫研究』四、二〇二一年)に詳しい。
- (5) 「家庭と時運…江藤哲蔵君」(『東京朝日』一九一八年一月八日四面)。
- (6) 松山守善、松山しのぶ『松山守善自叙伝』(熊本年鑑社、一九六四年)二七頁。
- (7) 福田東作編『人物と其勢力』(毎日通信社、一九一五年)。なお哲蔵は、九州私学校の創立自体には関与しておらず、廃校にあたり、後継の私塾を東京に設けてその運営に注力した。
- (8) なお松田との関係は、自由民権運動以来の全国遊説において江藤家を訪れた際に始まった可能性もあるが、定かではない。
- (9) 前述「家庭と時運…江藤哲蔵君」。

- (10) また哲蔵が急逝した際には、「二〇歳位の時より熾に政談演説の提灯持をやり政友会の院外団として活動」したと紹介された(『東京朝日』一九一九年六月二四日五面)。
- (11) 『東京朝日』一九〇四年二月六日二面、同七日二面。小山は、星亨系の移民事業に従事し一八九八年に井上敬次郎や菅原伝と熊本移民会社を起こしたが、一九〇三年一〇月末に退社している(『官報』一九〇三年一月一日、一九〇三年一〇月末)。また県内有数の資産家であった小山は、政友会系機関紙の九州新聞(九州自由新聞の後継紙)に私財を投下して、その経営を存続させた(おそらくそれがゆえに代議士となった)が、こちらも一九〇三年末に経営困難となり解散している(『官報』一九〇四年一月一三日、四四頁下段)。なお一九一〇年に『九州実業新聞』が『九州新聞』と改称して政友会系機関紙となっており、経営陣に重なりがあるも、政友会の機関紙経営は一旦途切れたようである(『新熊本市史』史料編第九卷上、一九九四年、九九二頁)。
- (12) 前掲『江藤哲蔵伝』一一一―一二二頁。
- (13) 鶴崎熊吉「分析してみたる政友会」(『時代勢力の批判』政教社、一九一四年)二九二頁。
- (14) 小林雄吾編『立憲政友会史要』(一九二〇年)五四―六三頁。なおポスト選出月の誤記は修正した。
- (15) 『時事新報』一九一六年三月一四―一五頁付、春夏秋冬子によるコラムより。前掲『江藤哲蔵伝』一三三頁に参照される。
- (16) 「一九〇四年一〇月二二日付岡崎邦輔宛原敬書簡」(伊藤隆・酒田正敏著『岡崎邦輔関係文書』(自由民主党和歌山県支部連合会、一九八五年)一四七―四八頁)。
- (17) 一九一六年八月三日付野田卯太郎宛江藤哲蔵書簡(九州歴史資料館所蔵『野田大塊文書』一六三五)。
- (18) 江藤伸子前掲「江藤哲蔵」。急逝した際には「政友会切つての選挙通で選挙の神とまで謳はれた」と紹介されている(『東京朝日』一九一九年六月二五日二面)。
- (19) 国権派の機関紙である『九州日日』は、反対党機関紙(政友会の『九州新聞』が無謀と評価する衆院選での六名当選を、十分に実現可能だと主張した(『勝算歴々たる六名計画』『九州日日』一九一五年三月二二日一面)。その理由、すなわち前回からの上積みとして、同紙は、先の棄権者分を国権派が獲得できること、そして中立候補者が反対党(政友派)の票数を削ぐことが期待できることをあげた。とはいえ国権派が六人目の候補を得ると

いうことは、政友会候補三名のうち三番目に票を集めた候補に、国権派候補六名のうち六人目に票を集めた候補が勝たなければならないということであり困難なことであった。

もつとも次点候補が議席を得る方法は正攻法だけではない。三月二五日の開票日、六番目の議席を得られなさそうなのが判然とするなか、国権派の意向が作用したためか、政友会支部などに警察の家宅捜索が入り、政友会候補宗像政の運動員に対する選挙違反捜査が行われた(『政友会支部の家宅捜索』二十六名召喚せらる、井嶋弁護士も捜索を受く)『九州日日』一九一五年三月二七日三画)。この捜査の結果次第では、政友会当選者の無効をもって六人目(次点であった安達)の復活当選がありえたが、これは成功しなかった。結果として、次点候補の安達を復活させるために、国権派のなかで五番目に票を得て当選した平山岩彦が辞退し、憲政会全体の指揮をとった本選挙の功労者である安達に議席を譲ることで本選挙は落着いた(『九州日日』一九一五年三月三〇日)。

- (20) 『原敬日記』一九一九年六月二四日。
- (21) 前掲『江藤哲蔵伝』三九八―九九頁。『哲蔵伝』の補遺として、二〇〇〇年ごろに執筆されたもの。
- (22) 玉井清「原敬と立憲政友会」(慶應義塾大学出版会、一九九九年)第二章。
- (23) 真辺将之「大隈重信」(中央公論新社、二〇一七年)三九六―四〇〇頁、伊藤之雄「大隈重信」(下、中央公論新社、二〇一九年)二七五―七七頁。
- (24) 奈良岡聰智「加藤高明と二大政党制」(山川出版会、二〇〇六年)一七五―七六頁。
- (25) 「一九一六年八月二一日付原敬宛岡崎邦輔書簡」(『原敬関係文書』書簡編一、三九八―九九頁)。
- (26) 「首相留任の決意…寺内伯との内交渉事実、元老の対首相態度如何」『時事新報』一九一六年八月三日三画。
- (27) 『東京朝日』一九一六年七月一七日二面。
- (28) 「首相寺伯交渉顛末…侯伯の折衝数次を重ねて両者の主張遂に一致せず」『時事新報』一九一六年八月一八日三画。
- (29) 「山本達雄よりの内報によれば、寺内日光に伺侯までは官僚系に於て其顛末を発表し同時に輿論を喚起するの企図らしかりしが、日光より帰京後形勢一変せり、僅に時事新報に其顛末を公表せしに過ぎずとて其形勢の相違を報じ来れり、而して如此変化は拝謁奏上の際何等手答なきがため失望せしに非らずやとの評ありと」(『原敬日記』一九一六年八月二四日)。
- (30) 伊藤隆編『大正初期山県有朋談話筆記』(山川出版社、一九八一年)一三七

